

没後150年“早世の天才 ジョルジュ・ビゼー”

プログラム

今年は19世紀フランス音楽の作曲家の中でもひとときわ光る天才とうたわれながら、37歳を前にわずか36歳でこの世を去ったジョルジュ・ビゼーの没後150年に当たります。今日はビゼーの名曲を聴きながら、この天才作曲家の魅力に迫りたいと思います。

ジョルジュ・ビゼーは、1838年10月25日、フランスのパリに生まれました。父は声楽教師、母はピアノ奏者という恵まれた環境の家に育ち、幼少から音楽的才能を示し、1848年、10歳でパリ音楽院に入学しました。そこでピアノをマンモンテル、作曲をアレヴィとシャルル・グノーに学びました。1855年パリ音楽院在学中の17歳の時に作曲された交響曲第1番はすでにビゼーの個性が十分発揮されており、器楽作曲家としての彼の一面を端的に示しています。1857年、カンタータ「クローヴィスとクロティルド」でローマ大賞を獲得、この受賞により官費でローマに留学し、メディチ荘で3年間作曲に励みました。その後パリに定住したビゼーは、オペラの創作に力を注ぎ、1863年に作曲された歌劇「真珠採り」が出世作となりました。しかし、その後発表された歌劇「美しきパースの娘」、歌劇「イヴァン雷帝」等、いずれの作品も評判とはなりませんでした。1872年、リリック座からヴォードヴィル座に移った支配人カルヴァロの勧めでドーデの戯曲「アルルの女」の付随音楽27曲を作曲、劇よりも音楽が好評を得て、その中から4曲を選んだ組曲も聴衆を魅了したと伝えられています。この年には4手用ピアノ曲「こどもの遊び」があり、翌73年3月に、その中から管弦楽用に編曲した「小組曲」が演奏会で取り上げられ、ビゼーの名声はようやく上がりだしました。歌劇「カルメン」はそうした頃に着手され、1974年に完成、1975年3月3日に初演されますが、そのわずか3ヶ月後の6月3日、ビゼーは心臓発作によって命を落としました。色彩豊かな表現力、生き生きとした生命力は、特に劇音楽の分野で十分に発揮されましたが、他にも管弦楽曲、ピアノ曲、歌曲などを残し、ドビュッシーが「彼はあまりにも若く死んだ」と嘆いたように、その評価は今でも変わりません。今日は、ビゼーの名曲の数々をたっぷりお楽しみください。(中川)

ジョルジュ・ビゼー (1838~1875) :

歌劇 “カルメン” ハイライツ

- ① 前奏曲 ② 第1幕 合唱 ~ ハバネラ(恋は野の鳥)(カルメン)
- ③ 第1幕の二重唱(ミカエラとドン・ホセ)
- ④ 第1幕 セギディーリヤ(セビリヤの城壁の近くに)(カルメンとドン・ホセ)
- ⑤ 第2幕 ジプシーの歌(カルメン)
- ⑥ 第2幕 闘牛士の歌(エスカミーリョ)
- ⑦ 第2幕 花の歌(ドン・ホセ) ⑧ 間奏曲
- ⑨ 第4幕 フィナーレの二重唱(カルメンとドン・ホセ)

ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

アグネス・バルツァ(カルメン=メゾ・ソプラノ)/ホセ・カレラス(ドン・ホセ=テノール)

ヨセ・ファン・ダム(エスカミーリョ=バリトン)/ジャネット・ペリー(ミカエラ=ソプラノ)

ウィーン国立歌劇場合唱団

(1985.7.26 サルツブルク祝祭大劇場でのLive)

*** 休憩 ***

4手ピアノのための組曲“子供の遊び” ~ 1. 小さい旦那様、小さい奥様 2. 舞踏会

マルタ・アルグリッチ(ピアノ)/ダニエル・バレンボイム(ピアノ)

(2017.11.24 ウィーン・ムジークフェライン・ブラームス・ホールでのLive)

交響曲第1番ハ長調

ハインツ・ワルベルク指揮エッセン・フィルハーモニー管弦楽団

(1982.12.9 エッセン、アルフリード・クルツ・サールでのLive)

組曲「アルルの女」第2番

ジャン・フルネ指揮日本フィルハーモニー交響楽団

(1999.5.23 サントリーホールでのLive)

曲 目 解 説

ビゼー：歌劇「カルメン」

ビゼーの作品は生存中、なかなか評価されず、1872年に作曲された「アルルの女」、1873年に4手ピアノ曲を管弦楽用に編曲した小組曲「子供の遊び」によって、ようやくその名が広く知られるようになります。ちょうどその頃着手したのが、歌劇「カルメン」で、フランスの小説家・歴史学者、プロスペル・メリメが、1845年に発表した中編小説「カルメン」を題材にしています。1874年に完成し、初演は1875年3月3日、パリのオペラ・コミック座で行なわれました。初演は大成功とはなりませんでした。ビゼーの死後、多くの上演によって評価が高まり、今日では上演される機会が最も多い、屈指の傑作オペラに数えられています。開幕に先立って、前奏曲が演奏されます。第1幕—スペイン、セビリヤのタバコ工場の前にある竜騎兵の詰所で、衛兵のドン・ホセは勤務しています。タバコ工場の女工でジプシーのカルメンは、ここで一番人気があり、いつも若い男たちを魅了していましたが、ドン・ホセだけはまったく関心を示そうとせず、彼女は奔放な恋愛観を歌い（ハバネラ（恋は野の鳥））、手にした花をドン・ホセに投げつけて走り去ると、ホセの婚約者であるミカエラが、母からの手紙を届けるためにやってきて、二重唱となります。やがて工場の中では女工たちが喧嘩をはじめ、原因はカルメンだとして彼女は捕らえられてしまいます。護送役のホセはカルメンの誘惑に負け（「セギディーリヤ」を歌う）、彼女を逃がしてしまい、カルメンはパステアの酒場であなたを待っていてあげる、といって立ち去ります。第2幕—2ヶ月後、カルメンを逃がした罪から釈放されたホセは酒場へカルメンに会いに行きます。そこはカルメンの仲間である密輸業者がたむろする場所で、ジプシーたちの奏でる音楽に合わせて歌い、踊っていました（「ジプシーの歌」）。そこへ歓声とともに、セビリヤの人気闘牛士、エスカミーリヨがやって来て、得意満面となって闘牛士の勇ましさを人々に伝えます（「闘牛士の歌」）。閉店後、ドン・ホセは彼女からもらった花を手を愛を告白します（「花の歌」）。しかし、カルメンはすべてを捨てて一緒に暮らそうとホセに迫り、思い悩んだ末、ホセは脱走兵としてジプシーの仲間になってしまいます。第3幕～第4幕—カルメンのジプシー仲間は密輸で稼いでいましたが、そのことを知り後悔するホセに愛想を尽かしたカルメンの恋心は、すでにエスカミーリヨに移っていました。カルメンと愛の言葉を交わしたエスカミーリヨは、闘牛に招待し、その場を去ります。第3幕のあと間奏曲が演奏され、第4幕へ。人々の歓声が高まっていた闘牛場で、ひとりでいたカルメンのところに、ドン・ホセが現われ、やり直そうと愛を求めます。しかし、冷たく突き放すカルメンにホセは激昂し、短剣でカルメンを刺してしまいます（「フィナーレの二重唱」）。※巨匠ヘルベルト・フォン・カラヤン（1908～1989）は1985年と1986年にザルツブルク音楽祭で歌劇「カルメン」を指揮、1985年のカルメンはアグネス・バルツァ（1944～）、ホセ・カレラス（1946～）のドン・ホセ、ヨセ・ファン・ダム（1940～）のエスカミーリヨで名演が繰り広げられました。

ビゼー：4手ピアノ（連弾）のための組曲「子供の遊び」 作品22 から

第11曲 小さな旦那様、小さな奥様（二重奏）／第12曲 舞踏会（ギャロップ）

ビゼーは、1871年に4手のピアノ連弾のために、12曲からなる組曲「子供の遊び」を作曲しました。翌72年にビゼーはその中から5曲を選んで管弦楽用に編曲し、小組曲として1873年3月2日、パリのオデオン座でエドゥアール・コロンスの指揮で初演されました。12曲は、①ぶらんこ（夢想）②こま（即興曲）③お人形（子守歌）④回転木馬（スケルツォ）⑤羽根つき（幻想曲）⑥ラッパと太鼓（行進曲）⑦シャボン玉（ロンディーノ）⑧陣取り鬼ごっこ（スケッチ）⑨目隠し鬼ごっこ（夜想曲）⑩馬とび（奇想曲）⑪小さな旦那様、小さな奥様（二重奏）⑫舞踏会（ギャロップ）からなっていますが、決して子供が弾くように作曲された訳ではなく、かなりのテクニクと表現力が必要な曲となっています。11曲と12曲はアルゼンチン出身のふたりの大家、マルタ・アルゲリッチ（1941～）とダニエル・バレンボイム（1942～）の連弾による演奏です。

ビゼー：交響曲第1番ハ長調

ビゼーは、3曲の交響曲を書いたと言われていますが、現存するのは交響曲第1番ハ長調だけで、ほかの2曲は1859年に作曲され、破棄されたとみられています。この最初の交響曲は、1855年、17歳の秋にパリ音楽院でジャック・アレヴィの作曲クラスに在学中、約1ヶ月で作曲されたと推定されています。しかし演奏もされずに忘れられてしまった草稿が、1933年にパリ音楽院の図書館で発見されたことから、はじめてこの曲の存在が知られるようになります。発見者の音楽評論家からこの知らせを聞いたビゼー評伝の著者で音楽学者のパーカーは、このことを大指揮者フェリックス・ワインガルトナーに伝え、非常に興味を持ったワインガルトナーは1935年2月26日、バーゼルにおいて自身の指揮で初演しました。翌1936年6月にはシャルル・ミュンシュの指揮でフランス初演も行なわれました。少年時代の作品とはいえ、早くもビゼーの個性があふれていて、南欧的な情緒や、若々しい爽快感と美しさは、新鮮な魅力に溢れています。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴォ 第2楽章 アダージョ 第3楽章 スケルツォ 第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ
名指揮者ハインツ・フルベルク（1923～2004）が1975年～1991年まで音楽監督だったエッセン・フィルとの名演。

ビゼー：“アルルの女” 第2組曲

ビゼーは、パリ・ボードヴィル座の劇場支配人カルヴァロの依頼を受け、1872年にアルフォンソ・ドーデの戯曲「アルルの女」のために27曲の付随音楽を書きました。1872年10月1日に初演された劇そのものは成功とはいきませんでした。音楽は好評で、自信を得たビゼーはそのうちの4曲を、フルオーケストラの組曲に編曲し、1872年11月10日のパドルーの演奏会で初演、大好評を得ました。これが現在の第1組曲ですが、のちにビゼーの親友エルネスト・ギローが新たに4曲を選び、編曲したのが“アルルの女”第2組曲です。ともにポピュラー・コンサートの欠かせないレパートリーになっている名曲です。

第1曲 パストラール 第2曲 間奏曲 第3曲 メヌエット 第4曲 ファランドール

フランスの名指揮者ジャン・フルネ（1913～2008）がたびたび客演していた日本フィルとの名演奏です。